
海から来た幸い

浅葉りな

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

海から来た幸い

【コード】

N2806C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

「雨の日にどこでもない場所で」の続編。海の向こうの国から、王女がフェリシアの誕生日パーティにやってきた。それが、事件の発端で……。

フェリシアはテーブルの上のティーポットをつかみ、まだ甘い香りのたちのぼるミルク・ティーをぶちまけた。

「何をなさいますの、フェリシア姫！」

いれたてのミルク・ティーを浴びせられてもなお、従妹は金切り声をあげていた。

着ている白いドレスが台無しになっているのは、けっしてミルク・ティーのせいだけではないはずだ。

「アンディのことを悪く言うからだわ」

フェリシアは声を低くした。普段の声はよく通る、冬の空気のようなソプラノ・ヴォイスだ。

「ただどそれでは、この失礼ないところを黙らせることなどできそうにない。」

「……次は砂糖を浴びせてやろうかしら？」

フェリシアはテーブルの上にある、陶器の小瓶に手を伸ばした。

「本当のことを言ったままですわ！ それをどうして、こんなことをされなければならぬというんですの！」

「あなたはアンディを見たことがあるって言うの？ 見もしないでそういうことを言うなんて、失礼にもほどがあるわよ！」

「見たことなんか、あるわけないでしょう！」

従妹が叫ぶ。

そのとき、フェリシアの手をうしろから伸びた手がつかみ、引きよせる。

「フェリシア」

耳元で吐息とともに発せられた言葉が、フェリシアをわずかに落ちつかせた。

怒りが完全におさまったわけではないけれど、ものを考えるくらの冷静さは取りもどすことができた。

「はなしてよ。これだけは譲れないのよ、アンディ」

即座に答える。うしろにいるのが誰かなど、フェリシアにはとうにわかっていた。遠慮をしなければならぬような相手ではない。

「はなしたらそれを投げるだろう？ まったく、いつもいつも騒がしい」

静かな声音だった。それだけに、アンディの怒りの深さが知れて、フェリシアは身震いした。

アンディはいつも静かに怒る。天使のようにほほえみながら、悪魔よりも残虐に。フェリシア以外の人間には、いくらでも残酷になれる人だ。

それでも思いきり腕を伸ばす。アンディの指が食いこむが気にしない。もう少しで瓶に手が届くのだ。

「……アンディ！」

「もうやめるんだ」

「いやよ。あの子がなんて言ったと思ってるの、あなたのこと？」

「俺は聞いてない」

「『あなたの婚約者、ばけものなんですって？ 羽根があって、おまけに魔法使いなんでしょう？ 国のためとはいえ、そんな方と結婚なさるなんておかわいそうに』って……そう言ったのよ！」

フェリシアは上品ぶった従妹の口調をまねた。自らの言葉で語るには、それは汚らわしすぎた。くりかえすのにさえ鳥肌がたつ。

「どれも本当のことだ」

「悔しくないの？ ばけものなんかじゃないっていうのに。翼のはえた人間なのよ」

従妹に背を向けて、フェリシアは向きなおった。

「人間なのよ……」

頭ひとつぶん高いところに、アンディの頬がある。フェリシアはそうつとふれた。雪のように真白く、体温などなさそうなのにあたたかい肌。

長い睫毛に縁取られた瞳を、昔はガラス玉のようだと思ったもの

だった。けれど、今は海の色によく似ていると思う。のぞきこむと、アンディは唇に笑みの形を刻む。

身体ははまだ少年らしさを残していた。ローブに隠れてよく見えないのが残念だ。

その顔は一分の間もない造作をしている。

そういえば　と、フェリシアは思いだしていた。昔、アンディは、有翼人は神の恩寵をえるために美しく生まれてくるのだと言った。幼い期間が長いから、守られなければ生きていけないのだと。

「ねえ答えて、アンディ」

アンディは何も言わなかった。そのかわりにか、抱きしめてくる。だがわずかして、それは動きを封じるためだと気付く。

ずるいわ、とフェリシアは心の中でつぶやいた。

「すまない」

アンディが従妹に向かって謝る。

フェリシアは彼をにらみつけ、低く言いはなった。

「謝ることなんてないわよ」

「……フェリシア」

アンディが置いたわずかな間は、とがめるかのような雰囲気を感じていた。

フェリシアは身を強ばらせる。涙があふれてしまいそうで怖い。

「行こう」

フェリシアを横抱きにしてアンディは部屋を出た。

フェリシアがうしろを見遣ると、従妹はだらしなく口を半開きにしていた。いつものすまし顔が台無しで、いい気味だと思った。

隣室のつくりはフェリシアの部屋と大差ない。

毛足の長い絨緞に、壁は真白でしみひとつない。ただ違うのは、脚立を使っても一番上の本が取れないような本棚があることだ。あと

は、机もベッドもテーブルも、双子のように同じだった。アンディはうしろ手に扉を閉めた。それからフェリシアを解放する。

「フェリシア、俺が何を言いたいかわかるか？」

アンディに見つめられてフェリシアはたじろいだ。冷たい泉を思わせる視線だった。

「わからないに決まってるわ。私はあなたじゃないもの」

「なら言う。謝るんだ」

「いやよ。後悔なんてしてないんだからね、私」

フェリシアはアンディから目をそらした。これ以上まつすぐ見つめられたら、平静でいられる自信はない。

「それでも、だ。茶会の最中に、無作法なことをしたんだろう？」

理由はどうあれ、それは謝るべきことだ。臣下をけなされたくらいであそこまで……と、人の目にはうつる

「臣下じゃないわ！ あなたは私の婚約者よ」

「正式じゃないさ」

「そんなの関係ない」

アンディの顔を見る。

アンディは口を開きかけてつぐみ、また開いた。

「従妹とはいえ貴族の娘だ。それに恥をかかせたとあっては、王に迷惑がかかるだろう？」

「お父さまならわかってくれるわ」

アンディはしばらく何事かを考えているようだった。眉をよせ、何処とも知れない場所を見る。

「行ってくる」

「どこによ」

「お前の従妹のところに」

「謝りに？」

アンディがうなずく。フェリシアが引きとめる間もなく出ていってしまう。

「何なのよっ！」

フェリシアは部屋のまんなかでじたばたしてみろ。疲れるだけなので、すぐにやめた。

本棚のすぐそばにあるアンディのベッドに座ってため息をついた。わかっていない、と思う。アンディはきつと何ひとつわかっていない。

叫びだしたいような気がした。

けれど叫びはせずに横になる。ふかふかしていて気持ちがいい。

怒ったら疲れてしまった。本格的な眠気を感じて、羽根ぶとんの中にもぐりこむ。

清冽な花の香が鼻腔をくすぐった。アンディの使う、魔法の香の残り香だろうか。

あとでアンディが眠っている自分を見つけたら、どんな顔をするだろう。そんなことを考えながら眠りについた。

ティルカの春は絢爛と聞く。

冬の寒さが厳しいぶん、春はどの季節より美しい。だから人は待ち望む。

いつせいに、示しあわせたかのように芽吹く木々、いつそすがすがしいほどに愛らしく咲きほころぶ花。どれも、故国デーズにはない。

彼女は緑の目を細めた。

ふう、とため息をつく彼女の銅色の髪を、ティルカの春風が優しく揺らす。

「どうかなさいましたか、サフィニアさま」

真向かいに座る従者を見遣り、サフィニアはつと顔をあげる。

「何でもありませんわ。ただ、この気候をうらやんでいただけ…

…。デイズは潮風が吹いていて、髪がべたついてしまいますもの。手鏡をおよこしなさいな」

従者はうやうやしく、サフィニアに手鏡とブラシを渡した。

「あら、気がききますのね。おまえ、名は？」

「ルシアスともうします」

「……覚えておきましょう。ルシアス、この馬車に魔法をかけているのもおまえですの？」

「はい、ですが何か？」

「普段はあのゆれが気に入らないのだけれど、今日は静かによくつてよ」

ルシアスは頭をたれる。

サフィニアは手鏡に視線をうつした。

淡いピンクの唇に、魅了の魔法をこめた紅をさし、髪をブラシでととのえる。

サフィニアはティルカの王城に思いをはせた。

ティルカの世継ぎの姫君は、魔法使いと婚約したという。

しかも、その魔法使いはばけものだともつぱらのうわさだ。

今宵、ティルカ王女の誕生祝いにかけた、姫君たちを歓迎する夜会が開かれる。ティルカ王女の婚約者の魔法使いも来るのだからか。

「楽しみですわ……」

サフィニアがもらした心の声のひとかけは、鏡に吸いこまれるようにして消えた。

外は闇。

フェリシアの髪と同じように黒一色だ。おだやかにそそぐ月明かりは、闇に吸いこまれてしまう。

だが大広間は光に満ちていた。

ティルカ産の上質な水晶のみを使ってつくられたシャンデリアが、そこかしこにぶらさげている。貴婦人の胸には、燦然と輝石が輝いていた。

「フェリシア王女」

わざわざ壁ぎわにいたフェリシアは、なかば引きつった顔を取りつくるいつつ、姫君らしくほほえんだ。

「もう十六におなりになられたのですね」

青年の顔には見覚えがない。どこかで会ったことがあっただろうかと、フェリシアは頭の中で面影をさがす。

「ええ。ところで、どうして私だとおわかりに？」

やはり会ったことはない。場をつなぐためにあたりさわりなく返した。

「王女のおうわさは、国内だけでなく国外までも届いていらっしやいます」

「まあ、どのようなうわさかしら？ 聞かせていただきたいわ」

フェリシアは内心舌を出す。

当然、猫をかぶっているのだ。

容姿について誉められるのは、日常なのだ。いいかげん飽き飽きしてくる。けれど無愛想に対応するわけにもいかず、不愉快なことこの上ない。

「黒檀のような、それでいて絹糸のつやをもつ髪と、大粒のアクアマリンのごとき瞳をもつ姫君と、吟遊詩人はうたっております。まるで精霊の女王のようだと」

「さぞかし落胆なさったことでしょうね」

「いいえ、うわさ通りの いや、うわさ以上の美しさです」

調子にのってだるうか、顔を近づけてきた青年をさりげなく振りはらう。本当だったらすぐにでも殴りつけてやりたいところだったが、場所を考えてフェリシアは耐えた。

「一曲、踊っていただけないでしょうか」

「かまいませんわ。足を踏んでしまっても 怒らないでください
ね」

青年が気取って出してきた手に軽く手をのせ、フェリシアはほほえんだ。

広間の中央、人々が踊る中に入っていく。フェリシアが部屋のすみにいる楽隊に目配せすると、曲調がゆったりしたものにかわった。はやい曲では、フェリシアはステップを踏むことができないのだ。そうでなくともダンスは苦手だった。

大理石の床はヒールの高い靴で歩くと小気味よい音をたてる。くるり、くるりと弧を描くようにステップを踏むのがティルカ風だ。

必要以上に青年に近づかないように常に一定の距離をたもつ。踊っている間に十三回、相手の足を踏みつけてしまった。十三回めに、

「ごめんなさい……ダンスはあまり、得意ではなくって」

「王女に踏まれたとしても、羽毛ほどの重さも感じはいたしません」
言いながら青年は顔をよせてくる。熱い吐息を感じ、フェリシアは嫌悪感をあらわにした。

唇を近づけてきた時点で、我慢は限界点を超えた。

「無礼者！」

力いっぱい平手打ちをくらわせる。乾いた音が静かなホールに響いた。

フェリシアは肩で息をしながら、青年に向けてつづけて叫ぶ。

「名乗りなさい！」

フェリシアの声はよく響く。
青年は声を震わせて答えた。

「クルデイス・アルガルダともうします」
クルデイス・アルガルダ。

そうたしか、ティルカの侯爵家、アルガルダ家の次男坊。プレイ
ボーイで有名な男だったはずだ

「おぼえておきましょう」

冷たく乾いた言葉を紡ぐ。フェリシアはクルデイスを視線で射抜
いた。

踵を返して出口に向かった。

ホールはそれ自体が独立した建物となっている。王宮から庭園を
つづきる形になっている、長い長い渡り廊下でつながっているのだ。
「気分がすぐれませんが。風に当たってまいります。私のことは気に
なさらずにつづけてください」

ほかの出席者や王の静止の声も聞かず、フェリシアは出ていった。
ドレスのすそを持ちあげて、月下の庭園を歩いていく。

庭は早咲きの薔薇で埋めつくされていた。

ほころびかけた蕾、そして力のかぎり開いた紅の薔薇。

そして、深緑の葉。夜露にぬれそぼって、青白い月影に浮かびあが
っている。

しげみの中、フェリシアは白っぽい影を見つけた。

「 アンディ」

独り言でもつぶやくように口にして、ドレスが露にぬれるのも気
にせずかけよった。

白い衣を纏い、薔薇の中にたたずむアンディ。白っぽい影に見え
たのも、ひとえに全体的な色素のうすさのせいだ。輝く月と同じ金
髪に白い肌。

「 やっぱりにここにいたのね」

アンディのそばによってフェリシアはささやく。「ティルカの姫
君」という人々の作りあげた幻想を脱ぎ捨てて、いつものようにほ

ほえんだ。

振り向いたアンディは眉をひそめる。

「おまえ、また抜け出してきたのか？」

「違うわ。失礼なやからがいたんだもの、仕方ないのよ。アルガルダの次男坊つてば、いきなりキスしようとしたのよ！ これもアンディがいなかったからだわ」

一気にまくしたてて、フェリシアはアンディにもたれかかった。

こういうときならアンディも、いくらでも甘えさせてくれるとフェリシアは知っていた。

「今度、呪いの干し首でも送りつけておこつ」

「何それ」

「夜中にけたたましい笑い声をあげながら部屋中を飛びまわるんだ。寝不足は間違いないな」

……本気？

訊ねようとしてやめた。本気に決まっている。あまり冗談を口にする人ではない。

「まあいいけど……でもね。あなたがいれば、そういうことは起こらなかったのよ。アンディを見たら、誰だって逃げ出すに違いないもの」

わずかに鬨りがあつて、だからこそ神秘的で。

本当に人なのかと疑いたくなるほどの美貌を備えているから、人はいつそ恐怖すら感じる。見ためほどに無口でもなく恐ろしくもないのだと知っているのは、多分フェリシアだけ。誇らしい反面、悲しくもあることだったけれど。

「ただの姫君お付きの魔法使いが、王侯貴族の集まる夜会に？」

「どうしてそんなこと言うの？ 誰が何と言おうとも、あなたは私の婚約者なのに」

「どうしてだと思つ？」

「わからないわよ、そんなこと」

自嘲を含んだアンディの言葉で、身体の奥に痛みがはしった。

けれどフェリシアの口が紡ぎ出すのは、なぐさめやいたわりの文句ではない。今にも癩癩を起こしそうな、子供じみた叫びだ。

「いずれわかるさ、おまえにも」

「はぐらかさないで！」

アンデイの襟元をつかんで揺らしながらフェリシアは叫んだ。はぐらかされてばかりではいけないのだ。

「いつかとかいずれじゃなくて、私は今、知りたいの」

「物事にはすべて、砂時計があるそうだ。砂が落ちはじめたときにはじまって、落ちきってしまうと終わる。じゅうぶんに砂が落ちてからでないと、言えないこともある。」

ほら、そろそろ戻るんだ。あとでまた会いにくればいい」

頭をくしゃり、となでられてフェリシアは腹がたった。まったく子供扱いで、対等ではない。

恨みがましく見上げたたん、アンデイの唇が降りてきた。

右頬に、そして左頬に。

最後に額に触れ、頬を両手で包んでくる。

「これで変な虫はつかないさ。だから、せつたくのパーティを楽しんできて、あとで話でも聞かせてくれ」

フェリシアはうなずいた。顔が強ばって、うまく笑えない。

スカートのすそをひるがえして、薔薇のしげみを抜けて走った。

あのままあそこにいたら、すこしおかしくなってしまうそうで、嬉しい反面怖かった。

息つく間さえもなく出ていくフェリシアを見ながら、サフィニア

は扇に隠した口もとを楽しげにゆがませた。

評判の美姫も実はただの子供。愛らしくも美しくもあるが、あんな小娘、相手にするまでもないだろう。

「ルシアス、フェリシア王女はどこへ行ってしまったかと思って？」「うしろに控え、サフィニアに影のようによりそっていた男が深々と礼をする。

「フェリシア王女の婚約者というのが力ある魔法使いだそうで、何か起こるとかならずその方のもとへ行かれると聞いたことがあります」

「そう……。これからもその調子でおやりなさい」

サフィニアはルシアスに言葉をかけてはやるものの、見遣ることさえしなかった。

「ですがサフィニアさま、フェリシア王女の婚約者は、ばけものだという噂です。人の生き血をすすり、外見は非常に醜悪だとか……。ティル力を滅ぼされたくなければ王女を、と要求したそうです。王女は魅了の魔法をかけられてしまったらしく」

「まあ、なんておかわいそうな王女さま」

言葉とは裏腹にサフィニアは嬉しそうな笑みを浮かべている。

「ルシアス、わたくしは今からその婚約者とやらを見に行くことにしましょう。姉上や兄上におもしろい話を持ちかえれそうですね」

舞踏会やパーティーなどは、実はそれほどおもしろいものではない。肩は凝るし足は痛くなるし、その上ドレスは体をしめつける。

食事は出されても、上品に小鳥がついばむ程度にしか口をつけることはできない。唯一の楽しみといえば、美貌を見せつけることくらいだ。

背中へと流れる銅色の髪が、サフィニアが歩きたびに、天使のはたきのようなかるやかな音をたてる。硬質に見える髪ではあるが、本当は絹糸のようにやわらかい。それがクリスタルをふんだんに使った、シャンデリアの光に透けて宝石のように輝くさま。

エメラルドの瞳には星が浮かび、憂いをおびて儂げで。

ドレスの下に隠された、大理石のごときすべらかさの、小鹿のよ
うな肢体はわずかしが見えないからこそなまめかしい。

サフィニアを見れば誰であれ、惜しげもない賞賛を投げかけ、感
嘆のため息をもらす。それはけっしてきらいではない。

「わたくしも気分が……。夜風に当たってまいりますわ」

とつてつけたように言いわけし、ルシアスを連れて出た。

フェリシア王女が出ていったことで、皆すくなくならず動揺してい
たのだろう。

そのおかげで人に見とがめられず外に出ることができたのだが、
サフィニアはあまりおもしろくはなかった。フェリシア王女とくら
べて自分が見劣りするとはどうしても思えない。

「足音を消した方がよろしいでしょうか？」

「そうね……でも魔法使いがいるなら、見つかってしまうかもしれ
ませんわ」

「大丈夫でしょう。今、王宮内のいたるところに魔法がかけられて
います。わずかな魔力ならうまくまぎれてしまうでしょうから」
「ならいいでしょう。おやりなさい」

ドレスのすそをつまんで持ちあげ、夜露にぬらさないよう注意し
てサフィニアはとまる。ルシアスと向かいあい、淡紫の瞳を見つめ
た。彼の、ゆるやかにウェーブがかかった銀糸の髪の毛の一本
一本にまで、魔力が満ちているのがわかった。

口の中で呪をつぶやき、ルシアスは手をかざした。この程度の魔
法はデイーズの魔法使いなら誰にでも、発動体の杖がなくとも扱う
ことができる。夜会の最中に他人を害する魔法を使えないよう、杖
はティルカ王家に預けさせられているため、大掛かりな魔法は使え
ないけれど。

サフィニアは、一見何も変わっていないように見えた。だが、確
実に魔法はかかっている。足踏みしても音はしない。

ルシアスが朗々とうたうように唱えるのを聞くことができなかつ
たのは残念だとサフィニアは思った。

ディーズの魔法使いは、魔法王国ディーズの生まれであることを誇りとし、呪をよく響く声でうたうものが多い。

昔、魔法使いが迫害されていた時代、唯一魔法使いを受け入れた国、ディーズの民であることを誇りに思わぬものはないのだ。だからディーズには数えきれぬほどの髪と目の色に、四種類の肌の色、あがめる神は三種あり、公用言語はふたつある。

「行きましょう」

サフィニアはディーズ語でいった。ティルカの人間が聞いたとしても発音と音律の複雑なディーズの言葉を完全に理解することは難しい。

「ええ」

ルシアスも流暢なディーズ語で答える。

「それにしても、フェリシア王女はどこへ行ってしまったのかしら？」

フェリシアのすぐあとに出て来たはずなのに。

彼女の姿は見あたらない。

「どこかのしげみの中にもいるのではないのでしょうか」

「そんなところでいったい何をしているのかしら……汚らわしいこと」

ルシアスは答えず、木陰に隠れて一方をさした。

紅の花弁が見える

この芳香は間違いなく薔薇だ。

サフィニアもルシアスの隣に行き、木陰からそちらをつかがった。やわらかく、優雅に降りそそぐ月影。

その下に立つのは、清冽な印象さえうける白い翼を持つ少年。

髪は豪華な金色で、瞳はサファイアそのものだ。真白いローブを着ているものの、質素な衣服がことさら彼の美しさを引き立てている。

どこかで見たことがあった気がした。

彼そのものでなくとも、とてもよく似た何かを。

ああ、そうだ。

サフィニアはふと気づく。

ティルカの春に似ているのだ。

絢爛な、いつそすがすがしささえ感じさせる春に。

「あちらに、フェリシア王女もいらっしやいます」

ルシアスのひとことでサフィニアは我にかえった。

視線をわずかにずらせば、先ほどとはうってかわった表情を見せるフェリシアがいる。

あの美姫と名高いフェリシアと同一人物だとは、どうしても信じることのできなさそうな、ゆるんだ顔。高貴という言葉にはそぐわない顔をしたフェリシアは、ただの可愛らしいお姫さま、だった。

ふたりが何を話しているのか、サフィニアの耳には届かない。

ただ、仲がよさそうだということだけは見てとれた。うわさのように、魔法によって作られた関係には見えない。

やがてフェリシアは去って、その婚約者のみが残された。

少年はかがんで薔薇を摘みはじめ。魔法にでも使うのだろうか。

「うわさとはかなり違うようね」

「そのようですね。あれではまるで子供です」

「悪かったな」

ルシアスに答えた声はサフィニアのものではなかった。

遙か北にあるという、永久凍土の氷のような声音だった。詰問するような調子だ。

サフィニアが振りむくと、はたしてうしろには少年がいた。

「フェリシアがいたから黙っていたが……そこで何をしている？

答えによつては」

冷たい炎が燃える瞳を向けられて、サフィニアはすぐに目をそらしてしまった。

だが急に、理不尽な扱いをうけているような……そんな気がしてサフィニアはくつと上を向く。

「わたくしはディーズ王国第一王女、サフィニア・ジカルディ・デ

「イズですわ。あなたこそ、何のおつもり？」

「不審人物には、自らの判断で尋問する権限があたえられている。悪く思わないでほしい」

「本当はすまないだなんて羽毛のひとすじほどにも思っていないと、如実にわかる態度だった。」

クール・ビューティ。

サフィニアの脳裏にそんな言葉がおどる。

しかもこの態度。

今まで自分の美貌に心奪われなかったものなどいないというのに！まるで伝説の氷姫のようではないか。誰も愛さず、求婚してくる男をすべて氷像に変えてしまったという永遠の少女のよう。

サフィニアは、はらの底から笑いがこみあげてくるのを感じた。

だが、そんな様子は微塵も見せず、あでやかに笑む。

「ねえ、ここでお会いできたのも何かの縁ですわ。せめてお名前をお聞かせ願えませんかしら」

わきに控えたルシアスに目配せすると、彼はどこかへ姿を消した。すぐ近くにはいるのだろうか、姿はどこにも見えない。

どこまでも気のきく男だ。悪くはない。従者はこうでなければならぬ。

サフィニアは満足し、少年をしっかりと見すえる。

「わたくしが名で、あなたを縛るとお思いですかしら？ そんなことはいたしませんわ。そう、この名にかけて」

胸の前で星を描く。魔法使いの誓いなのだ。けっして破ることはできない、何よりもかたい誓いだった。

「……アンディ」

言うと同時に、アンディと名乗った少年は嘆息した。

「姓はありませんの？」

「ああ、それ以外には名はない。今は」

「今は？」

言葉を途中でさえぎっても、アンディは渋い顔はしなかった。

サフィニアはそれをいい兆候ではないかと思った。誰でも、好意を持っていない人間に

「フェリシアはそれでかまわないと言っている」

「でしたら、アンデイと呼ばせていただいてもよろしいですかしら？」

「なぜ、名を呼ぶ必要がある？ デーズは島国、ティルカは山国だ。さほど国交があるわけでもない。もう会う機会もないだろう」

「そのようなこと、女の口から言わせるおつもりですか？」

頬を赤らめ、目をふせる。よほどの堅物でも、ここまでやって気づかないわけがない。

「化粧の濃い女は嫌いだな」

考えるそぶりさえ見せずにアンデイは言いはなった。

サフィニアは小刻みに体を震わせる。アンデイからは見えないように拳を握って、いつでも殴ることができる用意をした。

さすがに思いなおして、平手に戻したけれど。

「失礼にもほどがありますわよ！ 他国の姫に向かって……」

「招かれてきて、その国の王女の婚約者を誘惑するのも、ティルカに対してかなり失礼だと思うが」

顔が熱かった。

正しいのはたしかにアンデイの方で 化粧が濃いつい発言をさしひいても、サフィニアの方が分が悪い。

「……それでは、ごきげんよう」

サフィニアは言い捨て、ルシアスを呼んだ。

消えたときと同じように現れたルシアスは、深々と頭をたれ、サフィニアの言葉を待っているようだった。

「部屋へ戻りますわよ。ルシアス、おまえも来なさい」

ルシアスはさらに深く頭をたれ、やはり先ほどと同じように口の中で呪をつぶやく。

「おぼえておいていただきたいですわ、アンデイ。わたくし、わたくしのプライドを傷つけるような方は許しませんでしてよ」

移動の魔法を使うときの、あの何とも言えない不快感が頭の中でうずいている。それを我慢して、サフィニアは悪意で満たしたほほえみを浮かべた。

視界がうすれる。意識もだ。

世界がゆがみ、ねじくれ、のびて縮む。

耳に熱した鉄串を刺しこまれたような感覚のあと、気がついたときにはサフィニアは王宮の客室にいた。

移動のときに乱れた髪を手櫛でとのえ、持ってきた荷物に歩みよる。

「ルシアス、“眠り姫”の準備をなさい」

サフィニアの心の中は冷たく煮えたぎっていた。

今までサフィニアの誘いを突っぱねたものはいても、ああまで侮辱したものはいない。もちろん、突っぱねたものは、死んだほうがマシだというほどのめにあわせてやっている。

許せなかった。

サフィニアは奥歯をかみしめた。血がにじむほど。

「夜会場へあとで使いをやって、気分がすぐれないので部屋に戻ったと伝えさせなさい」

妙な邪魔が入らぬように。

予備の杖を手にして髪をかきあげる。

ルシアスが広げた、魔法円の描かれた布の上に立ち、サフィニアは呪をうたった。

サフィニアほどの使い手ともなれば、香などの媒体は必要ない。

魔法円だけでじゅうぶんだ。

「フェリシア・ルーヴェラーラ・アリュウディア・テイルカ、闇に沈みて眠りに堕ちよ！ わたくし、サフィニア・ジカルディ・デイズの名において命ずる！ 眠りの腕にとらわれて、ふたたび目覚めることのないように！」

杖をかざして叫ぶ。

魔力が渦を巻き、収束した。空間を渡り、フェリシアのもとへと

向かっていく。

普通の人間の目には見えない。

魔法使いには見えないわけはないが、防げるわけもなかった。デイズの魔法使いしか知らぬ秘術だったので。

「後悔すればいいですわ。かわらぬ姿で永遠に眠りつづける想いびとの姿を、ただ眺めていればよろしいの」

サフィニアが哄笑した、その瞬間に。

魔力がはじけた。フェリシアに送った魔法が、完全にはかからずに消えてしまったのだ。波動がはしった。

反動でサフィニアの髪が数本、宙を舞った。

「どういうことですか？」

美しいだけの、姫君に、魔法が、はじかれた！

相手は魔法使いでさえないというのに！

あつてはならないことだ。

サフィニアは杖を床に叩きつけた。白樺で作った杖はかたく、壊れない。硬質の音が響きわたる。

「フェリシア王女の護り手の力がうわさ以上だったのでしょ？」

ルシアスは冷静だった。従者としては有能だったが、女心はわかっていないようだ。

「わかっていますわ、それくらいのこと。わかっていますのよ。

それでも、悔しいの。このわたくしが負けるなんて！」

サフィニアはヒステリックに叫びつづけた。

ふいにめまいがフェリシアを襲った。

夜会に戻って、ほかの姫君とたわいもなく当たり障りもない会話をしている最中のことで、つい座りこんでしまう。

「どうなさいましたの？ お気がすぐれませんかしら」

「大丈夫ですわ、すこし立ちくらみを起こしてしまっただけですから」

おろおろする他国の姫君を安心させてから立ちあがり、フェリシアは首をひねった。

今まで、こんなことは一度もなかったというのに。

「あら、額が赤くなっていますよ」

別の姫君がそう言ってさしだした手鏡を見、フェリシアは唇をかんだ。

どうしたのだろう。先ほどアンディにふれられたところだけ、ひどく赤くなっている。冷やせば治るだろうか。

前髪を手櫛でととのえるふりをして額を隠した。

「先ほど外で、木の枝にぶつけてしまったんです」

くるしい言いわけをしながらも、フェリシアは心の中ではアンディに向かって文句をつけていた。彼以外に、どんな原因があるというのか、彼女には想像もつかなかったのだ。

彼女が知りうる限り、魔法使いは彼だけだった。アンディはそして、彼女だけの魔法使いでもあったのだ。

そのあと、夜会は月が中天にかかる頃合までもつづいた。

カーテンの隙間からさしこむ光が顔に当たってまぶしい。

一晩くるまっていた、がちょうの羽根ぶとんはいい具合にぬくくて、そのまましばらくまどろんでいたいくらいだった。

けれどもフェリシアは思いきって寝台から出たのびをした。

うすいのに暖かい寝巻きのまま、窓ぎわにより、カーテンをわず

かにひいて外を見る。

陽がちょうど昇るところで、紫がかった茜色の空に薄雲がかかって、幻想的な雰囲気だった。

窓を開けて肺を朝の空気で満たしたら、気持ちいいかもしれない。けれど寝巻きのままで人に見られては困るのであきらめた。

侍女が起こしに来るまでには、まだしばらく時間がある。一度目覚めてしまったというのに、また寝直すのもよくない気がした。

ふと隣の部屋へとつづく扉を見遣る。ドアの向こうにはアンディがいる。

婚約が決定したときから、隣室はアンディの部屋になった。当時十五になったばかりのフェリシアでさえ、何を考えているのかと思つたものだ。男女の部屋がこんなにも近いなんて。

そういう知識から遠ざけられている彼女でさえ、その程度のことには知っている。

それでも、アンディはそれほど信頼されていたし、信頼にたる人物でもあった。

それにほとんど部屋にはいない。よく、ふらりとどこかへ出かけて、そのまま三日も帰らなかったり、そうかと思えば、部屋にはいても出てこなかったりする。

でも何かあれば、何をおいてもフェリシアを助けに来た。

アンディは優しくない。

いつもそばにいてはくれない。

ほかの貴族たちのように、美辞麗句をならべもしない。

そうだとこのに純粹で、とても不器用だ。いつそ冷たく思えるほどの不器用さで、アンディなりの愛し方で想ってくれているのだと、フェリシアは知っていた。

急に起こしにいったら驚くだろうか。もしかするとアンディは怒つてしまつかもしれないし、一睡もせず本を読んでいるかもしれない。

それでも、朝起きて一番に発する言葉はアンディへの「おはよう」

と決めている。日課だった。

はじめのうち、ひとことも口をきかないフェリシアを侍女たちは奇妙なものでも見るように扱っていた。けれども、それが婚約者へ一番にあいさつするためだと知ると協力してくれるようになった。フェリシアにしてはめずらしく、もう半月もつづいている。

半月もの間、アンディがくだらない思いつきにつきあっているというのも新記録だ。朝、フェリシアが目を覚ますころに限ってはかならず部屋にいる。

足音を忍ばせてドアの方へと歩いていく。

ノブに手をかけると、鍵はかかっていたのにか軽くまわった。中には人の気配がある。

「……？」

扉の隙間から中をのぞきこむが、誰もいない。寝台のくぼみがアンディがそこで眠っていたことを示していた。

いつも彼が読んでいた本は綺麗に本棚へかたづけられている。夜更かしをしていたわけではなさそうだ。

アンディは読みかけの本はしおりをはさんで机の上に放りだしておくのだ。

待っていてもアンディが帰ってくるわけもない。フェリシアはおとなしく自室に戻った。

アンディのいつもの気まぐれで、半月もの間つづけた日課をすっぽかされたのかと思うと腹がたった。足音も荒くベッドへ向かい、まくらを扉へ投げつけた。

光に透かしても黒いままの髪をかきあげて鼻で息をする。

まくらもとに置いてあった本を手にとって、ぱらぱらとページをめくった。アンディに無理を言って借りてきた初級の魔法書なのだが、ほとんど理解できなかった。やはり魔法使いにはなれそうもない。

第一王位継承者であるのだから、自分の身ぐらいは守れなくてはと思う。今は誰もが甘やかしてくれて、危険から遠ざけてくれてい

るけれど、それはいつまでも続くものではない。

わかつているはずだというのに、なお甘やかしつづけることは優しさとは違うと思うし、子供扱いされているようでいやな感じだ。

窓の外を見ると、にわかには曇り、薄めた黒インクを撒きちらしたかのようになっていた。

きっと、昼からは雨が降るだろう。

姿見にうつるフェリシアはいつにも増して姫君然としている。

国内外からの賓客が、今晚行われるフェリシアの誕生日を記念した夜会に出席するために、王宮を訪れているのだ。他国のもの目にさらすとなれば、念入りに着飾らなければならなかった。

侍女がフェリシアの黒髪を高く高く結びあげている。腰ほどまでも届く髪を半刻もかけて結うのだが、フェリシア自身は手持ちぶさたであった。

「ねえ、何もそこまでやらなくともいいんじゃないかしら？」

ドレスを着せられ椅子に座らされ、動かず前を向いていなければならなかったのだ。フェリシアは今日の服装やそのほか鏡にうつるものをじっくりと観察できた。

今日着ているのは薄絹を幾重にもかさねたドレスだ。胸元のラインをさりげなく強調しつつ、スカートは花のようにふくらませてある。近頃のはやりなのだ。

肌の白さと漆黒の髪を引きたてるべく、ドレスはごくごく淡い青色をしていた。

「姫さまは美姫と名高いお方、それをさらに美しく見せることこそ私たちの喜びなのですから。もうしばらく我慢なさってくださいませ」

侍女が言った。

まだ年若く、フェリシアと五つもかわらないだろう。くすんだ金

髪に碧眼で、下町の娘のだが、働きものということで取りあげられたのだ。

ティル力では、家柄などをあまり重視しない。フェリシアの母親でさえ、もともとは平民だった。

「あなただつて、じゅうぶん綺麗よ。私のこともいいけれど、自分も着飾ればいいわ」

「もつたいないお言葉です」

「それに私が綺麗だつて思つてほしいのはひとりだけ。でも、きつとどんな服を着ていようと、よく見もしないでかわいい、なんて言うような人よ。今日だつて朝からいないし……」

「ああ姫さま、じつとしていてくださいます、せつかく結った部分までほどけてしまいます」

侍女は慌てた。

「アンディさまなら、部屋にいらっしゃつたような気がしますけれど」

「もう帰ってきたのね。あとで会いに行こうかしら」

髪がやつと結びあがり、フェリシアはすこしだけ自由になった。

「どんな顔するかしらね」

「きつと驚かれますよ」

侍女は靴や手袋などの小物を取りに行く。フェリシアは結びあがつた髪のせいで、白鳥のように高雅な首筋を惜しげもなくさらしていた。

フェリシアの髪はくせがつきにくく、櫛もよく通る。そのぶん結いにくく、油断をすればすぐにほどけてしまったため、ピンを何本も使わなければならない。きつくしてあるので痛かったが、それもしばらくのしんぼうだ。

「姫さま、お手をお出しになつてください」

フェリシアが手を出すと、白絹の手袋がはめられる。つづいて足にも、薄絹の靴下を。髪には銀のティアラを飾った。

これくらい自分でもできるといふのに、姫君だからとさせてもら

えない。ケーキを焼いたり刺繍をしたり、そういうこともきらいではないのに、滅多にできなかつた。

「あの蒼い石は何？」

ティアラに飾られた、ひときわ輝く蒼い石は、中に羽毛のように見えなくもない、白いすじのようなものが入っていた。

「蒼羽石、という石だそうです。めずらしい石だそうですよ。ここまで大きいものはほかにはないそうですから」

「気に入ったわ、中の模様、アンディの羽根みたいで」

侍女はほほえんだ。

「できましたわ。これならアンディさまだつて惚れなおすに違いありません」

「そう？」

やっと解放されて、フェリシアは立ちあがる。思いきりのびをした。

「朝餉までは、間があるわよね。アンディの顔を見にいつてきてもいい？」

「もちろんかまいませんわ。ただ、はやくお戻りになってくださいね」

「わかつてるわよ」

フェリシアは浮かれた気分で隣室の扉の前へ行った。侍女はうるの方で小物をかたづけはじめ。

「どう、似合うかしら」

言いながら飛びこんで、フェリシアはふと足をとめた。
いないのだ。誰もいなかったのだ。

朝とはあきらかに違った。ベッドは、本当に人が寝ていたのか疑いなくなるほどとのえられていた。几帳面なアンディらしい。

本は机の上に山積みになっている。開きっぱなしの本のページが、風でめくれていた。

風にもてあそばれてカーテンがひるがえる。窓は開かれたまま。まるで家出でもしたみたいだ、とフェリシアは思った。

昔読んだ物語で、きれいな貴公子と結婚させられそうになった姫君が、愛する騎士と駆け落ちしたシーンが、たしかこんな感じだった。

「本当にアンディは部屋にいたの？」

「たしかにいらっしやいましたとも」

フェリシアが訊いても、侍女は手をとめない。本来ならとがめられるべきことではあったが、フェリシアはそういうことを気にしないので、例外的に許されていた。

「でもないのよ。ほら、見て」

「どうした？」

フェリシアが侍女を手招きしたとき、すぐ近くで声がした。高くもなく低くもなく、甘やかな声　アンディだ。

だが、姿は見えない。声は何もない空間から響いてくるのだ。

「冗談はやめて！　魔法を使っているのね、はやく顔を見せなさいよ」

ふざけてほしくない。

フェリシアは頭に血がのぼっていた。

せつかくの日課をふいにしたのも、彼の胸に飛びこんで甘えられなかったのも、何もかもが腹だたしかった。

「フェリシアさま、何をなさっているのですか？　アンディさまなら、そこにいらっしやるではありませんか」

小物を置いたままで侍女が来て、アンディの声が聞こえたあたりをさした。

フェリシアがいくら目を凝らしても、そこには何も見えない。よくよく見れば、何かがあるような気配はするのだけれど。

「どこにいるって言うの？　見えないわ、何も」

「フェリシア……」

ふわりと、ぬくもりがフェリシアを包んだ。

これはアンディのおいだ。

あの、晴れた日に干したふとんのような。おひさまによく似たに

おい。

「おまえ、何かされたおぼえはないか？」

ふざけているわけでも騙しているわけでもない、深刻さをはらんだ声だった。

アンディは、大したことではないときには、こんな声は出さない。

「何もないわ」

「昨晚おまえにやった虫よけの呪いが破られている。魔法にかけているな」

「虫よけ？」

「おまえに変なものが見つからないようにな」

フェリシアはアンディの翼とおぼしきところを抱きしめた。

興味などないようなそぶりでも、実は気にしていたのだ、この魔法使いは。

まったく素直ではない。

でも、だからアンディなのだ。

侍女は去っていった。邪魔をしないようにとでも思ったのだろうか。

「つまり、私にアンディが見えないのは、魔法にかけているからってことね？」

「ああ」

「じゃあ、大丈夫ね。こっちは偉大なる魔法使い殿がついてるんだもの」

「無理だな」

……

……

……

……

「は？」

「無理だ、と言ったんだ」

「どうしてよ！ 何でなの、何なのよそれは！」

暴れ出したフェリシアを、控えていた侍女が押さえた。

「魔法はデリケートなものだ。他者の干渉を許さない。しかもおまえにかかっているのは、中途半端なものだから、へたに手を加えればどうなるかわからない」

「じゃあ、どうしろって言うの？　ずっとこのままいなければならぬの？」

「犯人を捜しだして解除させるさ」

静かだった。

叫びだしたくて、泣きだしたくて、どうしようもないというのに、すべてを押し殺しているかのような、ある種の冷たさとか恐ろしさとかを感じさせる静けさだった。

怒っているだろうかとフェリシアは思った。

見えないから表情はわからないけれど、それでもきつと笑っているだろう。

いつそ美しさを感じさせるほどに、とぎすました刃のように、彼方にあるという極寒の地の氷のように。

「だから泣くな」

言われてから気づく。

頬を伝ってしたり落ちる、冷たいものの正体に。

「泣いてなんかないわ」

強がり口にする。泣いていないわけがない。

あとからあとから、とめどなく溢れてきているのは。

間違えるはずがない。

涙。

「目にゴミが入ったのよ。きっと睫毛ね。長いから、よく目に入っ
て痛むの」

額に触れる優しいぬくもり。

キスをされたのだとフェリシアにもわかった。

優しい、やさしい魔法使い。お願いだから甘やかさないで。

いつだってこうして守られてたら、私はずっと頼ってしまうわ。

何にもできない人間にだけは、なりたくなんてないの。
フェリシアは祈るようにすがりつき、アンディの翼で涙をぬぐった。アンディの翼は見えなかったけれど温かくて、だから余計に涙が出た。

フェリシアは廊下を歩いていて。アンディにかまってもらおうにも、姿が見えないのではおもしろくなかったのだ。

書斎にいつて暇つぶしになりそうな本を探すためだった。
向こうがわから、赤銅色の髪の姫君と、従者らしき青年が歩いてくる。

話しかけられなければいいなとフェリシアは思ったけれど、希望に反して姫君が近づいてきた。

「ごきげんいかが？」

高慢そうな口元を隠しもしない。

好きになれなさそうなタイプだ。こういう人間は、だいたいが美貌に自信を持っているから。

「あなたがフェリシア王女ですわね？」

と、相手の姫君がフェリシアをねめつけてくる。無遠慮な視線は不愉快だった。

「雨は気分を憂鬱にさせますね。ところで、お名前をお伺いしてもよろしいですかしら？」

フェリシアの答えを聞き、姫君が鼻で笑った。

「サフィニア・ジガルディ・ディースともうします」

表面上は丁寧だ。けれども多分、心の中では自分は馬鹿にされている。フェリシアは確信していた。こういうことに関して、彼女の勘はよく当たる。

「フェリシア王女は、ナイーブであらせられますのね」

「そんなことはありませんわ」

サフィニアが浮かべているのは冷笑だ。一見そうとはわからないが、多分。

いやな女。

フェリシアはできるだけはやく、彼女からはなれたかった。

「それでは、ごきげんよう」

なぜかフェリシアを見て嬉しそうに去っていくサフィニア。

慥然としながらそのうしろ姿を見つめる。

「……申しわけありません」

従者だけがその場にとどまり、フェリシアに向かって頭を下げた。

「サフィニアさまも、悪い方じゃないんです、ただ、その」

主をかばうさまがほえましかった。

あきらかにサフィニアよりも年上だろう青年が、まだ子供と呼んでも差し支えないような自分に向かって頭を下げているのだ。命じられたわけでもないというのに。

「ええ、気にしていないわ」

すぐにぴんときた。

サフィニアを見送る従者の視線は、フェリシアがアンディに向けられるものとよく似ているように思える。

多分、彼は恋をしているのだろう。あの高慢な、サフィニア王女に。

どこがいいのかわからなかったけれど、世の中、いろいろな趣味の人がいるものだ。フェリシアは笑顔でうなずいた。

「ルシアス、はやくいらっしやい！」

青年に、サフィニアの叱責がとんだ。

「本当に申しわけありません、ありがとうございます」

何度も何度も頭を下げながら、従者も去っていった。

「がんばってね」

フェリシアの声が、あの従者に届いたかどうか。

赤銅色の髪の姫君と、銀髪の青年は、身分の差さえなければ、とてもよく似合うだろう。

「身分の差……」

まるで自分とアンディのようだ、とフェリシアは思う。アンディだって、本当だったら身分違いだ。

ティルカでは、魔法使いの地位はそう高くない。政略結婚として国を守らせようと姫を差しだす、というはなはだ不本意な形でなければ、ふたりは出会えなかっただろう。

あのふたりの上にも、幸がありますように。

フェリシアは祈った。

サフィニアはフェリシアをひとめ見ただけで、魔法がどんなふう
にゆがんだか知った。

愉快なゆがみ方をしたようだ。

「ルシアス、婚約者の姿が見えないというのは、どついつ気分です
かしらね？」

おくれてついてきた従者に訊ねる。

「フェリシア王女は幼いですから、精神的な依存度にもよりますが、
なかなかシヨックは大きいかと思われます」

「いい気味ね。眠りにつかせてしまうより、こちらの方がよほどお
もしろいですわ」

サフィニアは高笑いをした。

「ですが……大丈夫でしょうか？ 国際問題になりかねないかと思
われますが」

「かまいませんわ。いざとなったら、戦でも仕掛けてしまえばよろ
しいわ。こんな平和ボケした国に、デイズが負けるわけはありま

せんでしょっ?」

ルシアスは渋面をつくった。彼があからさまにサフィニアに反対するかのような態度を取ったのは、これがはじめてだった。

「おまえ、従者の分際で、わたくしに逆らうつもりですか?」

「いえ、そのような大それたことは」

「そうよ、主に逆らうなんてことは、考えないほうが身のためですてよ」

「わかっております」

ルシアスが頭をたれた。

サフィニアはあまりおもしろくない。従順であるのももちろん、悪くはないのだ。だがこれでは、人形を相手にしているも同じ。

主に逆らいすぎるのも困る。不愉快だ。

それでも、無反応はさらにつらかった。どう扱っていいかわからないではないか。

「行きますわよ、ルシアス」

命じたなら、この男はどこまでもついてくるだろう。どんなことでもするだろう。

でもなぜか。

サフィニアは寂しかったのだ。

自分に従わない男というものも、悪くないのかもしれない。アンデイのような男とはまた違って、従順でありながら意志を持った青年。

「……何を考えているのかしら」

「なにかおっしゃいましたか?」

「なんでもありませんわ。おまえはわたくしのあとを、ついてくればいいですわ」

「はい」

「そういうこと以外、何か言えませんか?」

ルシアスの穏やかな顔を見ると、なぜかいらいらしてくる。

サフィニアはかんしゃくを起こした。

「ですが……主に逆らうなど、従者ごときに許されることではありませんから」

「そうでしたわね。そんなことを期待したわたくしがバカでしたわ」

「いえ、そのようなことは」

はつきりしない態度だ。

「せめて、はつきりしたらどうですか?」

「そのようなことは……」

「わかっていますのよ、別に返事など期待していませんわ!」

やつあたりだった。何にこんなにいらついているのか、サフィニアにはまったく言っていないほどわからなかったのだけれども。

扉の向こうでフェリシアは、午睡を決めこんでいるに違いない。

近頃はアンディがフェリシアの教育係を兼ねていたので、今はフェリシアもやることがないのだった。

厄介ごとばかり押しつけられているような気がしなくもないが、まったく気にならない。

フェリシアに会ってから変わったと、アンディは自覚していた。

先ほど昼餉をしたためたばかりだというのに、ふと目をやった窓の外には曇った空がのぞく。

窓に叩きつけるように、激しく水滴がぶつかっている。今夜は嵐になりそうだ。

光がはしった。

やや遅れて、大地を震わす神の怒号が響く。

どこか近くに落ちたかもしれない。町のそばに立つ大樹にだろう

か。

関係ないことを頭の中から追い払い、銀盆に清めた水をそそぐ。なかばまで満たし、表面のゆらめきがおさまるまで待つ。鏡のようになった水面にはアンディの顔がうつっている。

うしろには、不安げなフェリシアの顔が

「どうした？」

「雷が」

焦点の定まらない、アクアマリンのような瞳。

「怖いのか？」

自分よりも頭ひとつぶんも低い、小さな小さなフェリシアの身体を抱きとめると、彼女の瞳にやすらぎが浮かんだ。

水鏡をそのままにして、アンディはベッドのふちに腰かける。

「雷が怖いだなんて、まだ子供の証拠だな」

「魔物も魔法も怖くないけど、雷だけは別なのよ。アンディにはそういうもの、ないの？」

「……婚約者の癩癩、かな？」

アンディが苦笑しながらささやくと、フェリシアは握りこぶしでぽかすかと叩いてきた。

子供らしいしぐさだ。

白くて。

いとしい。

「はぐらかさないですよ」

拗ねたように口をとがらすさまえもいとおしくて、アンディはフェリシアに頬をよせる。

「アンディ？」

フェリシアの声が不安そうな感じを帯びた。

とまどっているのだろう。アンディとは違い、王宮で世間からはなれて暮らしているフェリシアには、どう反応すればいいものか、理解できないに違いない。

おびえることも、怖がることも、ないというのに。ただそばにい

るだけで、かまわないのだから。

「怖がらなくていい、ついてるから」

彼女はまだ幼いのだとアンディは思う。

だから壊してしまわぬように、そっとな触れる。

愛してもいるが、フェリシアの言うそれとはすこし意味合いが違っていた。彼女の言葉は、たしかに真実なのだろう。嘘偽りなどかけらもなく、思ったままのことなのだろう。

けれどもフェリシアは、恋をしているだけだ。まだ“愛して”くれているわけではない。

彼女が成長したなら、こういうときにはふたり、ベッドに倒れこんでもいい。それは今ではないけれど。遠い、先の話だろうけれど。安心してすがりつく、いまだ幼い姫君は、この想いを知っているのだろうか。

アンディはフェリシアの首すじ、ちょうど髪に隠れて見えないあたりに口づけて、あとはただ一定のリズムで肩を叩きつつつけてやった。

フェリシアがアンディのベッドで深い眠りに落ちてしまつものを見届けてから、起こさないようにそっと立ちあがる。

まさしく精霊の女王と呼ぶにふさわしい寝顔のフェリシアのブルーアイズには、たとえ目覚めたとしてもアンディの姿はうつらないがらにもなく、鼻の奥がつままれたような感じになって、あわててハンカチで顔を拭いた。

放っておいた水鏡に歩みより、アンディは水面に手をかざす。

水面がゆらぎ、一瞬、誰かをうつした。

ちらりとかいま見たものは、美しい赤銅色の髪

赤銅の髪の人間なら、ティルカにさえ星の数ほどいる。

それ以外にも、手がかりを。

アンディはふたたび唱えた。先ほどよりも強い呪文を。

強い魔法は身体に負担をかける。知ってはいたが、婚約者のために呪文を紡ぎつづけた。彼女さえ幸福であるのなら、自分はどうでもいいのだ。

ときはすでに、黄昏。

休む暇さえもなく、アンディは疲れはてていた。

けれども、その苦勞さえ忘却の彼方に押しやってしまえるほどの想いを持っていた。

透明なねずみのしっぽをつかまえたような、かすかだったが、たしかな手応えがあった。

巧妙に隠された、フェリシアに魔法をかけた犯人の残り香を、とらえることに成功したのだ。

あとは気配の糸が切れないように、慎重にたぐっていけばいい。

犯人の影を水面にうつしとる。

まっすぐ伸びた銅色の髪。

妖しい輝きをたたえる深緑の瞳。

口もとはかすかに笑みの形を刻む。

サフィニアだ。

フェリシアも美しい。が、うつしだされたサフィニアとは別種だった。フェリシアが小さくかれんな紅の薔薇なら、サフィニアは大輪の黄色い薔薇だった。どこか作りものめいていて、にじみ出る美しさとは違うのだ。

アンディが銀盆をのせた台に拳を叩きつける。盆から水がこぼれて、絨緞をぬらした。

高いところにつりさげられた、水晶を使った絢爛たるシャンデリアは、光をはじいてあたりにちらす。

その下で人々は夜会に興じていた。

今夜は無礼講で、立食形式で食事が振舞われていた。

一段高くなつた場所に玉座がしつらえられていたが、至尊の君はそこにはいない。普通の貴族のような顔をして、しつかり夜会を楽しんでいた。

小国ティルカの夜会だというのに、近隣諸国の王侯貴族のみならず、海をへだてた南の島々や東国からも賓客が訪れている。

皆、フェリシアをひとめ見ようという、なかば物見遊山のような気持ちがあるらしかった。

皆、自国の衣装を身につけ着飾って、会場はさながらドレスの品評会のような。

「フェリシア王女、こちらでお話しませんか？」

アンディは何か用があるとかで夜会をまたしても欠席し、とくに仲のいいものもないフェリシアはひとりめだたないように食事に没頭していた。だが同年代の姫君から声をかけられてしまったのだ。さして話をしたいわけでも、話すことがあるわけでもないのだが、無視するわけにもいかなかった。

フェリシアは不機嫌になりながらも笑顔をつくって話の輪にくわわった。

「お噂はわたくしどもの国までも届いておりますのよ」

砂漠の国の姫君が言った。浅黒い肌にこげ茶の髪の姫君は、砂漠の国特有の、透けるほどの薄布を何回も巻きつけて、要所を宝石飾りでとめていた。

フェリシアも話にしかなかったことのない衣服だったが、この姫君によく似合っつて美しいと思つた。

「光荣です」

ひかえめに答えながらも、フェリシアはどうせくだらない噂でし

ようよと、聞こえないように毒づいた。

「フェリシア王女の美しさは有名ですもの」

と、今度は南の島国の姫君。原色を多用した色あざやかな衣服にはそでがなく、スカートもふくらんではない、冬の寒さが厳しいティルカでは考えようもないデザインだ。

「そんな……」

手で口もとを隠してうつむいて、上目づかいに姫君たちを見た。

この場合、肯定すれば高慢に見えるし、かといって否定すれば嫌味に見える。

ティルカの侯爵家の令嬢は、そんな事情を察したようで、言葉こそかけてこないものの、大変ねと目で言ってきた。

「そういえば、ここには殿方がたくさんいらしていますけれども、フェリシア王女の婚約者さまはいらっしやいませんか？」

十二、三の小さな姫が屈託なく問うてきた。

「そのようなこと、お訊ねしてはいけませんわ。フェリシア王女の婚約者さまは、人間ではないのですもの」

砂漠の姫がたしなめると、島国の姫があとをついだ。

「政略結婚とはいえ、そのような方と長い間いることに、わたくしなら耐えられそうもありません……おかわいそうなフェリシア姫」
フェリシアは拳を握った。

姫君たちに悪意がないことくらいわかっている。優しい気持ちから出た言葉なのだろう。

だが。

彼女らの憐れみは見当はずれで、屈辱だったのだ。フェリシアにとつて。

激しさを増し、叩きつけるような雨と、木々をなぎたおさんばかりの風が荒れくるう中、魔法で守られたテラスにいるサフィニアを見つければ、アンディは降りたつた。

あまり人に見られたくなかったので、嵐の中、アンディは外を飛びまわっていた。雨よけの魔法は、移動しながらでは使えない。水を吸って重く冷たい服と翼も気にもとめず、サフィニアはいないかと下を見ていたのだった。

「サフィニア・ジカルディ・デイズ」

フルネームで呼びかける。サフィニアは顔をあげ、目を見開いた。「どうなさいましたの？ そんな恐ろしい顔をして」

婉然とほほえむサフィニアを、遠慮も何もなくねめつける。

「来い」

アンディはひとことだけ命じる。理由を語る必要さえない。何をしたのか知らないなどと言わせるつもりはなかった。

彼女のしたことは、どんな大義名分があろうとも、許せることではないのだ。アンディの基準では、それは万死に値するのだった。

「何の冗談ですかしら？ こんな天気の日に外に出ては、かぜを召してしまいますわ」

これ以上の問答はむだだと悟った。サフィニアはしらをきりつづけるだろう。

アンディはサフィニアの腕を引き、外へ連れ出す。

「何をなさいます！」

雨音でかきけされてしまいそうな、サフィニアの抗議にも耳を傾けず、雨にうたれながら薔薇園の中へと入っていった。

何をやっていても外からは見えない場所で、ほとんど人の来ないところといったら、アンディはほかに知らなかった。王宮内で出入りするところは少ない。

木陰でサフィニアと向きあう。

白い光が黒い雲間をかけぬけ、あとから雷鳴がついてくる。

サフィニアが身をすくませた。

「フェリシアに魔法をかけたのはおまえだな？」

雨粒がアンデイの全身にくまなく叩きつけ、髪や頬を伝ってしたり落ちる。睫毛からこぼれた水滴が目に入って痛い。

だが前方を身すえたまま、アンデイは答えを待った。

紅のおかげで色まではわからなかったが、サフィニアの唇は蒼白になっていることだろう。身体は小刻みに震えている。

「何を理由にそんなことを。理由如何によつてはティルカもただではすみませんわよ！」

「ティルカも何も、関係ない」

サフィニアの瞳が見開かれた。ぬれた女性は美しいものと相場が決まっているが、色香のかけらもなくなっている。

どちらかといえば、見苦しい。

「あなたはティルカの人間ではありませんの……？」

「俺はフェリシアの婚約者だ」

「なら、次期国王でしょう」

「フェリシアを守るなら、ティルカなんか滅びてもかまいはしない」

雨脚が一段と激しさを増した。

「政治なんか知らないし、知りたいとも思わない。そんなことは、やりたいものにやらせておけばいいんだ」

「デイズとティルカが仲たがいの原因が婚約者にあると知れたら、フェリシア王女の立場も悪くなりますのよ？ へたをすれば、

あなただって罪に」

「フェリシアさえ無事ならそれでいい」

サフィニアにとっては死刑宣告にも等しいだろうことを言いきる。言葉の裏に隠しているのは、ここでサフィニアの命を奪うことさえいとわないという決意だ。アンデイはうっすらと笑みを浮かべた。

「狂ってますわ」

深緑の瞳にうつしだされた自分の瞳を眺めながら、闇のようだとアンディは思った。何もうつさない蒼い闇が、ただそこにある、そんな感じ。

「そうかもな」

言い捨ててから、アンディは叫ぶように唱えた。雨が地面を叩くリズムも、風が吹きならす天然の笛も、彼の声にはなじまない。が、アンディが声音を変えずとも、次第に音は調和し、響く。そう大地に愛されし種しか奏でえぬ、奇妙で美しき調べだった。

水がアンディの手に収束し、ある一定の形をなした。

すなわち、剣。

流体としての性質をたもちながら、ひとつの形としておさまっている。

長さはだいたい大人の腕の長さほどで、アンディには不釣りあいだった。

アンディは剣をつきつけてサフィニアに吠える。

「フェリシアにかけた魔法をとくか、それとも死か。選ばせてやる」「脅しなどにわたくしが屈すると思いい？」

瞳の奥にはおびえのようなものが浮かんでいたが、サフィニアは強気だった。

何も言わずにサフィニアの、白い首すじを剣でひく。

うすく皮が裂け、一本の線ができる。そこから赤く血がにじみ、彩をそえた。

「アンディは、たしかに人ではありません」

フェリシアは猫をかぶったまま答えた。

「それでは、お角やお牙があったりしますの？ それともお耳がおおきいのでしょうか？」

小さな姫君はころころと笑った。まったく悪気のないことは、誰の目にもあきらかだった。

「そんなものはありませんわ。ただ、彼には翼がありますの。白くておおきくて　まるで天使さまのようですよ」

「見栄などお張りにならなくてもよろしいですね。翼があるだなんて」

「本当、です」

奥歯をかみながらフェリシアは答えた。

きつと、今、自分の目は空洞になっているに違いない。それこそ人形のガラス玉でできた瞳のように。そこまで感情をいきとどかせるような演技をこなす余裕がない。

助けて、とフェリシアは願った。

目を閉じて婚約者の姿を思い、勇気を、と心の中でささやくのだけれど。

いつものように浮かんではこない。アンディの姿を思い描くことができない。

見えてはきてもおぼろげで、もやもやとしていて中途半端な感じだ。

「……どうして？」

声を出してフェリシアはつぶやく。

本当は、誰に問うまでもなく、わかっているのだ。

アンディの姿を見ていないせいだ。

一年もの間、アンディはいつだってフェリシアのすぐそばにいたのだ。

途中、ふらりといなくなってしまうことだってあったが、フェリシアが呼べばかならず来てくれた。

だから何でもわかっているのだと、フェリシアはたかをくくって

いたのだ。

何ひとつ、わかってなんかいなかったというのに。

もし理解していたなら、面影が浮かんでこないだなんてあるはずがない。

目頭が熱くなった。

涙があふれ、頬を伝って落ちる。

泣くつもりなんてないのに、とまらなかった。涙が通ったあとは、熱くて熱くて、たまらなかった。

しばらくにらみあったあと、サフィニアはふと目をそらした。

「……とけばよろしいのでしょうか」

あくまで高飛車に言ってくる。胴色の髪をかきあげて、腕を組む。ぬれているので、あまりさまにはなっていないけれど。

「でもあの魔法は、わたくしにはとけませんの」

サフィニアに見つめられ、アンディは眉をかすかに動かす。緑の瞳は真剣で、嘘をついているようには見えなかった。

「方法がないわけではありませんけれど」

「どうすればいい？」

「古来より、魔法をかけられた姫君を救うのは王子さまですわ」

アンディは一瞬、サフィニアが何を言わんとしているのかわからなかった。

ざわめきが広がる。

けれどそれは仕方のないことかもしれない、とフェリシアは妙に冷静な頭で考えた。

夜会で祝われる本人が、泣いているのだから。

「フェリシア王女、お顔をおあげになってください。わたくしの言ったことがお気に障ったのならあやまりますわ。だから、お願いしますの」

小さな姫君がなぐさめてくれていた。フェリシアは笑ってやりたかったけれど、涙のせいでできなかつた。

ほかの姫君たちはただおろおろするばかりで、小さな姫君のようになぐさめようとはしてこない。

王と王妃は遠巻きにながめていた。自分たちにさえ、あの涙はとめられないと、そう考えているのかもしれないとフェリシアは思った。情けないふたりだけれど、そういうところには聡いから。

おお、と、感嘆とも驚嘆ともつかぬ声があがった。

見ると、サフィニアが誰かに引かれるようにして入ってくる。全身ずぶぬれで、今まで外にいたようだ。

サフィニアはすこし手前でとまったが、人々の視線は何かを追って移動してくる。

抱きしめられた、感覚があった。

ぬれて冷たい身体だけれど、いやな感じはしなかった。手探りでフェリシアも抱きかえす。

「 アンディ」

来てくれたのね。

フェリシアは涙とはまた別の、あたたかいものが込みあげてくるのを感じていた。

アンディの顔があるとおぼしき場所を見ながらほほえむ。唐突に唇に押しあてられる、あたたかな感触。

見開いた目に霞のように、見なれた輪郭が浮かびあがる。いつもと変わらない、王宮勤めの魔術士用ローブ。

飾りけもなにもなく、白いローブには金糸・銀糸で縫いとりがあ
るだけで。

ローブのすそからのぞく腕や首すじは、力をこめて握ったら折れ
てしまいそうなほどに細い。

うしろが透けて見えそうな白い肌。

淡い色の金髪は、本物の黄金さながらだった。

そして、瞳。

涼やかな蒼の。

かすかな優しさをたたえた、瞳。

唇をはなしたあとで、めずらしくアンディがほほえんだ。

フェリシアの耳にやっと、周囲の音が聞こえてくる。歓声だった。

犯人はサフィニアだ、とアンディの唇が音をもらさずに告げた。

うしろのサフィニアに目をやると、ばつが悪そうにうつむいてい
る。

ルシアスがいつのまにか、彼女のそばにひかえている。心配そう
な、思いつめた顔をしている。

もしかしたら、いざとなったら罪をひとりでかぶってしまうつも
りかもしれない。

アンディからはなれて、フェリシアは人々に向かって言った。

「私は、実は呪いにかかれていたのです。婚約者である彼　ア
ンディの姿が見えなくなるという呪いでした。だから今日まで、婚
約披露をはたせずにいたのです」

朗々と、静まりかえったホールにフェリシアの声が響いた。

「ですが、アンディとともに、魔法王国ディーズのサフィニア王女
が、私の呪いをとくすべを見つけてくださいましたのです」

フェリシアはサフィニアに向きなおり、極上ともいえる笑みをさ

さげた。

「感謝の言葉をいくら並べたとしても、たりないような気がしてなりません」

歩みよってサフィニアの手をとって、今度は人々の方を向く。ア
ンデイの手もとり、自分の方に引きよせる。

「私の誕生日を祝う夜会で、このような発表ができることを、心よ
り嬉しく思います。どうか皆さま、ふたりの気高き魔法使いに、盛
大なる拍手を！」

あいかわらず困ったようなサフィニアと、いつもと同じく無愛想
なアンデイと、安堵したようなルシアスト、姫君らしくほほえむフ
エリシアを、惜しめない拍手が包みこんでいた。

港はいつだって潮の香がする。

髪はべたべたしてしまつて、あまり気持ちは良くないけれど、フ
エリシアは潮風のおいが好きだった。

フェリシアは海辺の空気を胸いっぱい吸いむ。

「元気でね」

顔をあげてついでのように言う。

「あなたこそ」

高慢な瞳はあいかかわらずで、サフィニアは鼻で笑ってくる。

「この借りはいつかかならず返しますわ」

素直に『ありがとう』と言わないところがサフィニアらしいと思
う。

フェリシアは人目も気にせず声をたてて笑った。目のはしに涙

がにじんでくる。

「それじゃあ、遠い未来に、私の子供が困つてるとき、手をさし
べてやってちょうだい。それともその頃、行かず後家のおばさん
なってる？」

「いやな女ですわね、あなたって」

口ではそう言いながらも、サフィニアは楽しそうに目を細めてい
る。

あのあと、アンデイもサフィニアも救国の勇者あつかいで、今日
まで少ししか話せなかった。正直なところ、フェリシアはつまらな
かったのだけれど、仕方のないことだと我慢してきた。

フェリシアの言った“呪い”の話にも、矛盾はもちろんあったの
だ。けれども人々は都合のいいように解釈し、いつのまにやら、と
んでもなく大きな話になっていた。

いわく、呪いをとくために、悪い魔法使いの手先である竜を退治
した云々。

それでも事實はあなので、それを知っている一部のものは、ひ
っそりと静かに苦笑いした。

デイズがわは大さわぎで、こうして人知れず帰還することを決
定してしまった。まだ早朝で、空はうすい灰色をまぜた水色をして
いるような頃にティルカを出ていくと。

フェリシアは握手を求めた。

「今度この地を踏むときは、あなたの婚約者なんかメじゃないくら
いのいい殿方を連れてきてみせますわ」

「ルシアスもなかなかいいんじゃない？ アンデイには負けるけ
ど美形だし、何より忠実よ」

きつくかたく握りかえされた手にもう片方の手をかさねて、フェ
リシアは姫君にあるまじき左右が不对称な笑みを浮かべた。

「そんな、身分が違いますよ」

ルシアスは苦笑しながらも、まんざらではないようだった。

「では、ごきげんよう」

肯定とも否定ともつかぬ笑顔で、サフィニアは踵を返してあゆみ
いたをかけて、ディーズの船へと乗りこんでしまった。忠実なルシ
アスに手を引かれながら。

サフィニアが渡りきると、あゆみいたははずされて、いかりをあ
げる鎖をひく音が響きはじめる。

帆がはられ、魔法使いが風を呼ぶ。

そうして、ゆっくりと、ゆっくりと船は港から遠ざかっていった。
フェリシアはいつまでも眺めていたりはしなかった。走って港か
ら去ろうとする。

向こうから偶然だともいうように歩いてきたアンディと目があ
った。

無精な婚約者は、サフィニアの見送りには来なかったのだ。それ
でもフェリシアを迎えに来るあたり、マイペースというかなんとい
うか。

「ここまでくるなら、見送りにつきあってくれたってよかったじゃ
ないの！」

「あっちは顔をあわせづらいだらう」

「ああ、そういうこと」

フェリシアは額に手を当てて息を吐いた。

「おまえはどうして許したんだ？」

耳をそばだてていないと逃してしまいそうなつぶやきに、フェリ
シアは同じくらしいの大きさの声に笑顔をそえて答えた。

「あなたの思ったとおりよ。それが正しい答えなの」

つられてか、アンディも優しい表情を返してくる。

フェリシアが見上げた空は、春の色にそまりはじめている。

ティルカの春は、今年はいっそう絢爛なことだろう。

春の次には、短く激しい夏が、訪れる。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2806c/>

海から来た幸い

2009年3月24日09時50分発行